

## 地域社会ゼミナール AI(その2)

### 地域社会ゼミナール AI(その2)

2単位 4年(前期)

高橋 晋一・教授 / 社会創生学科

**【授業目的】** この授業は、文化人類学・民俗学的手法を用いて卒業研究(卒業論文作成)を進めていこうと考えている学生を対象としている。受講者は卒業研究の作成を目指して、文化人類学・民俗学の領域の中から自由に各自の研究テーマを設定し、授業中の発表・討議をふまえ、その研究内容の深化をはかる。

**【授業概要】** 文化人類学ゼミナール

**【キーワード】** 文化人類学, 民俗学, 地域文化, フィールドワーク

**【先行科目】** [先行科目]

**【関連科目】** 『地域社会ゼミナール AI(その1)』(0.5), 『地域社会ゼミナール AII(その1)』(0.5), 『地域社会ゼミナール AII(その2)』(0.5)

**【履修上の注意】** 地域社会ゼミナール AII(その2)とあわせて通年で受講すること。

**【到達目標】** 文化人類学・民俗学の研究領域の中から主体的に選んだ研究テーマについて、適切な方法による調査や分析をおこない、卒業論文にまとめることができる。

**【授業計画】**

1. 4年次前期には、卒業研究のテーマを確定し、調査・分析を着実に進めていくことが求められる。第一に、これまでの先行研究を広範かつ綿密に読みこなし、その方法論を学びとりながら応用や展開の可能性を探ることが重要である。第二に、独自の調査によって実証的なデータを収集し、研究目的にふさわしい分析を加えていかななくてはならない。授業では、それぞれの作業の進展に応じて数回の中間発表をおこない、その内容を教員および受講生全員で討議する。
2. 卒業研究には、受講者の主体的な取り組みと粘り強い努力が必要である。また、参加者全員が真剣な討議をおこなうことで、切磋琢磨しながら内容を高めていくことが期待されている。

**【成績評価】** 授業への取り組み状況と討議への参加意欲、報告内容の完成度をもとに評価する。

**【再試験】** 行わない。

**【教科書】** 教科書は使用しない。授業中に適宜プリントを配布する。

**【参考書】**

- ◇ 伊丹敬之 『創造的論文の書き方』有斐閣, 2001年
- ◇ 伊藤亜人 『文化人類学で読む日本の民俗社会』有斐閣, 2007年
- ◇ 佐藤郁哉 『フィールドワーク増訂版』新曜社, 2007年

**【授業コンテンツ】** <http://cms.db.tokushima-u.ac.jp/cgi-bin/toURL?EID=218782>

**【連絡先】**

⇒ 高橋 (088-656-9486, takahasi@ias.tokushima-u.ac.jp) MAIL (オフィスアワー: 月曜 12:00-13:00)

## 地域社会ゼミナール AI(その2)

2 units 4th-year(1st semester)

Shinichi Takahashi · PROFESSOR / DEPARTMENT OF CIVIL AND ENVIRONMENTAL STUDIES

**Target)** この授業は、文化人類学・民俗学的手法を用いて卒業研究(卒業論文作成)を進めていこうと考えている学生を対象としている。受講者は卒業研究の作成を目指して、文化人類学・民俗学の領域の中から自由に各自の研究テーマを設定し、授業中の発表・討議をふまえ、その研究内容の深化をはかる。

**Outline)** 文化人類学ゼミナール

**Keyword)** *cultural anthropology, folklore, regional culture, fieldwork*

**Fundamental Lecture)** [先行科目]

**Relational Lecture)** “地域社会ゼミナール AI(その1)”(0.5), “地域社会ゼミナール AII(その1)”(0.5), “地域社会ゼミナール AII(その2)”(0.5)

**Notice)** 地域社会ゼミナール AII(その2)とあわせて通年で受講すること。

**Goal)** 文化人類学・民俗学の研究領域の中から主体的に選んだ研究テーマについて、適切な方法による調査や分析をおこない、卒業論文にまとめることができる。

**Schedule)**

1. 4年次前期には、卒業研究のテーマを確定し、調査・分析を着実に進めていくことが求められる。第一に、これまでの先行研究を広範かつ綿密に読みこなし、その方法論を学びとりながら応用や展開の可能性を探ることが重要である。第二に、独自の調査によって実証的なデータを収集し、研究目的にふさわしい分析を加えていかななくてはならない。授業では、それぞれの作業の進展に応じて数回の間隔発表をおこない、その内容を教員および受講生全員で討議する。
2. 卒業研究には、受講者の主体的な取り組みと粘り強い努力が必要である。また、参加者全員が真剣な討議をおこなうことで、切磋琢磨しながら内容を高めていくことが期待されている。

**Evaluation Criteria)** 授業への取り組み状況と討議への参加意欲、報告内容の完成度をもとに評価する。

**Re-evaluation)** 行わない。

**Textbook)** 教科書は使用しない。授業中に適宜プリントを配布する。

**Reference)**

- ◇ 伊丹敬之 『創造的論文の書き方』有斐閣, 2001年
- ◇ 伊藤亜人 『文化人類学で読む日本の民俗社会』有斐閣, 2007年
- ◇ 佐藤郁哉 『フィールドワーク増訂版』新曜社, 2007年